

令和 2 年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
 (新学習指導要領に向けた実践研究)
 成果報告書 (概要)

受託団体名
埼玉県

1 指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
埼玉県	特別支援学校	病弱	埼玉県立けやき特別支援学校 (さいたまけんりつけやきとくべつしえんがっこう)

2. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
令和 2 年 4 月 23 日	全体研究会 ・ 令和 2 年度の研究概要 ・ 研究報告会に向けての日程 等	○資料配布にて対応 別途、職員が集まった際 (6/12) に補足説明を実施した。
令和 2 年 5 月～	毎月 1 回 授業改善に向けた研究グループ 別途、毎月 ICT 活用研修 又は 研究推進のための研究会議 (新学研) を実施 研究 G : 5/21, 6/22, 7/16, 9/17, 10/15, 10/29, 11/17 新学研 : 5/25, 6/26, 7/3, 7/29, 9/25, 10/19, 11/27	○計画どおり実施・終了 昨年度の反省を踏まえ、 研究推進とは別日程で、新学研を設定し、ICT 研修も同時進行した。 各研究単位での会議を定期的に設定することで、スムーズな研究推進につながった。
令和 2 年 6 月～ 11 月上旬	研究報告会 1 次案内発送 (6 月) 校内研究授業並びに研究協議 報告集作成 研究報告会 2 次 (最終) 案内発送 (9 月) 研究報告会申込受付開始	○計画どおり実施・終了 各研究単位での研究授業並びに研究協議を実施した。
令和 2 年 11 月下旬 ～12 月 3 日	研究報告会申込受付終了 研究報告会準備 ・ 校内発表会 ・ 参会者向け接続確認 (2 回) ・ ホームページへの資料掲載	○計画どおり実施・終了 今年度の研究についての校内の確認 オンライン報告会に向けての準備並びに参会者

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者打ち合わせ ・ 前日準備 	<p>への接続サポートを行い、当日の円滑な運営を図ることができた。</p>
令和2年12月4日	<p>研究報告会</p> <p>講演者○文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官 深草 瑞世 様</p> <p>指導者○京都女子大学・京都教育大学大学院 教授 滝川 国芳 様</p> <p>○埼玉県教育局特別支援教育課 主幹兼主任指導主事 楠奥 佳二 様 指導主事 佐藤 幸博 様 指導主事 内川 雄介 様</p>	<p>○オンラインにて開催</p> <p>日程内容は、オンライン開催の意義等踏まえながら、検討を行った。</p> <p>全国から72か所、320名の方に御参会いただいた。参会者の感想等からニーズとオンライン開催の有用についても知ることができた。</p> <p>本研究3年間を通しての講評をいただくとともに、講演や講評において、国や県の特別支援教育、特に病弱教育の動向についても御教示いただいた。</p>
令和2年12月中旬～	<ul style="list-style-type: none"> ・ 報告集完成 ・ 研究報告会参加者アンケートの取りまとめ ・ 研究報告会反省 ・ 今年度及び3年間のまとめ ・ 来年度以降の研究方針について <p>研究G： 12/17, 1/21</p> <p>新学研： 12/21, 1/29</p>	<p>○計画通り実施・終了</p> <p>今年度及び3年間のまとめと来年度以降の研究方針について検討した。</p> <p>来年度以降の研究概要については、年度内に職員に周知し、新年度へのスムーズな移行を図る。</p>
令和3年3月18日	<p>全体研究会（次年度に向けて）</p>	<p>研究の方向性としては、『自立活動におけるICTの活用』とし、学校教育活動全般をとおして、適宜ICTの活用を図り、学びを充実させていくことの確認ができた。</p>

(2) 研究課題

病弱教育における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりに関する実践研究をテーマに、3つの学びの実現に向け、ICTの活用を図ると共に、効果的な指導内容・方法について研究する。

(3) 研究の概要

病弱教育における主体的・対話的で深い学びの実現に向け、以下の2つの柱を中心に実践研究に取り組むこととする。

1 主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善

児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指して、今回の改訂に挙げられている主体的・対話的で深い学びに焦点を当て、これまでの授業実践との関連や課題を整理し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の方向性を明らかにしていく。今年度は、昨年度までの反省を踏まえ、特に「深い学び」に迫ることができる実践を意識的に進めていく。

2 主体的・対話的で深い学びの授業づくりのためのICTの活用

ワーキンググループ（以下WGと省略）を設定し、それぞれのWGで活動（事例報告等）を行っていく。授業改善の方向性と併せ、次のテーマを中心に病弱教育におけるICTを活用した指導内容・方法の実践に取り組み、主体的・対話的で深い学びの授業づくりを実践する。

①障害特性に応じたICT機器の有効活用

タブレット端末に加え、電子黒板等の実践例を蓄積し、障害特性に応じてICT機器を有効活用した指導方法や指導内容を検証

②双方向通信による学習

双方向通信技術を活用し、前籍校での教育活動への一部参加や行事不参加時の校内やベッド上での間接体験の実践

③VR等、仮想現実、疑似による体験学習

VR等の新たな技術を使った機器を活用し、仮想体験や疑似体験による学習への参加について実践

(4) 研究の成果

1 主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善

(1)「主体的な学び」について

・IWBの保存機能を活用することにより、前回の学習を次回にそのまま提示でき、学習の流れを視覚化することができた。興味関心が高まって学習がわかりやすくなることで、児童生徒の粘り強く取り組む姿勢も育った。

(2)「対話的な学び」について

・同時双方向型通信を活用することで、病室で授業を受けていても対話的な活動を展開することができた。「自分自身や教材（もの）との対話」「以前在籍した仲間との対話」等、対面する相手ではない対象との対話的学習にも考え方を広げて、実践を進めることができた。

(3)「深い学び」について

・「共に学ぶ仲間や以前に在籍していた仲間の意見・先哲の知恵・通信先に映る景色」などから情報を取り入れ、いくつかの情報を精査して自分の考えを形成するという実践ができた。

2 主体的・対話的で深い学びの授業づくりのためのICTの活用

(1) IWBについて

- ・タブレット端末を通してIWBに書き込むことができ、病室と画面を共有することで病室の児童生徒と一緒に学習ができることで主体的、対話的で深い学びに向けた学習を進めることができた。
- ・画面の保存機能の活用により、前回の授業の画面をそのまま映し出すことができ、学習のつながりを視覚化することで、学習への見通しがもちやすくなった。

(2) 同時双方向型通信について

- ・Zoom、OriHime、PadBot、kubiなど、各機器の特徴を明らかにできたことにより、児童生徒一人一人の状態に応じてより適切に機器を選択することができた。

(3) 360度カメラ・VRについて

- ・教員自らが撮影して教材を作成し、授業で活用する実践を進めることができた。活動制限がある中でも、実際の体験に近い学習ができたり、没入感・臨場感のある体験をしたりすることができた。教科書に加え、疑似体験による学習ができたことで、理解をより深めることができた。

(5) 課題と今後の方策

○教育課程（時間割）の工夫・改善

- ・本校の場合、現状では教室と病室の時間割が異なるため、同時双方向型通信を利用して合同の授業を計画する際は、その都度どちらかの授業を変更するという調整が必要になる。「いつでも、すぐに」合同の授業を実施できるようにするためには、年度当初の時間割の組み方への工夫が必要である。

○状況に応じた学びの選択

- ・本校の児童生徒は入院中のため、毎日安定して学習ができる児童生徒ばかりではない。そのため、体調不良で授業ができない状態が続く場合は授業時数も少なくなってしまう。その状態が続くと、できる時にできるだけ先に学習を進める必要が生じ、結果として単元の中心的課題を押さえて次に進まざるを得ない形になってしまうことがある。そのような状況でも主体的・対話的で深い学びに向かう取組ができるか、考えを深める必要がある。

○環境整備とICTスキルの維持向上

- ・本研究では様々なICT機器を活用した実践を進めることができたが、さらにいろいろな場面で実践を充実させられるよう引き続き教員の技能向上をめざしたい。また、特にネットワーク接続が不安定という理由から、授業中のトラブルを懸念して使用を控えがちになる様子も見られるので、一層の機器や環境の整備、充実も図りたい。